



マイペー

ス

川崎ゆきお

自分のペースがある。それに持ち込めば安定する。それは人のペースに合わせることでもいい。自主的に作る必要はない。マイペースと言いながらも一人で決められることには限りがある。特に集団では。

自分のペースに持ち込むには、ベースが必要だ。ベースがなければ、ペースも作りにくい。ペースとベース、よく似ている。だから、いくら自分のペースに持ち込みたくても、ベースがなければ難しい。そのため、ベース作りから始めることだろう。そのベースに乗っている状態を、自分のペースに持ち込んだというの だろうか。

「マイペースですか」

「そうです。これはねえ、すぐに分かります」

「何が」

「だから、どんなことを日々やっているのかが」

「簡単なことを難しく言ってませんか」

「言ってません」

「じゃ、どんなことです」

「朝ねえ」

「はい」

「十分か十五分早く起きてしまった」

「そう言う話なのですか」

「ここに含まれているのですよ。いろいろなことが」

「はい」

「朝一番にやる仕事があるのです。野暮用のようなもので、雑用のようなものですが、これは決まりがありまして、順番があります。例えましょうか」

「はい、お願いします」

「起きてトイレへすぐに行くか、少しテレビを見てから行くか、または顔を洗うのが先か、トイレが先か……」

「例えは、もういいです」

「じゃ、続けます」

「お願いします」

「えーと何の話でした」

「十五分早く起きたのでしょ」

「つまり、その順番でこなし、最終的には朝食をとってから家を出ます。しかし、いつもこなせていない事柄があります。例えますか」

「そのまま進めてください」

「はい、それがいつもできないまま家を出ていたのですが、できるようになりました。十五分ほどでできることです」

「それは早起きは三文の徳ってことですか」

「違います。得はしません。しかし、ペースが狂うのです。いつもそれで、やり残したまま家を

出るの、戻ってきたり、出先でやるのですが、これがペースを乱す。つまりずれ込んでいるような、スケジュールが押しているような感じを抱いたまま一日を過ごす感じです」

「それで」

「よく考えると、いつも起きていた時間よりも、遅れて起きていることが判明しました。十五分遅く起きてきていたのですね、最近。だから、十五分分がない。だから、こなせない。だから、ずれ込み、落ち着かない」

「えーと」

「詰まらん話だと思うでしょ」

「まあ」

「つまりそのペースでは、そのペースに踏み残しが出る」

「要するに怠けないで、朝はしっかり起きましようと言う話でしょ」

「そうです。つつい十五分ほど寝過ごしていたのです」

「簡単な話でしたねえ」

「しかし、ペースを減らすと、寝坊できる」

「まあ、そうですが」

「よく考えると、やらなくても良いことまでやっていた」

「知りませんよ。そんな細かい話」

「しかし、十五分ほど早く起き、以前の起床時間に戻ったときは、マイペースを感じましたねえ。やるべきことはやり、家を出たと、得心しました。いい感じで一日が過ぎているとね」

「だから、いつもの時間に起きれば、良いだけの話でしょ」

「これなんて、一人で決めて、一人でできるから、まあ何とかなるのですが、団体戦になるとそうはいかないですなあ。ペースの取り合いになります」

「そちらの話の方が大事でしょ」

「そうでした」

ペースを征する者、ペースを得るといふ諺はない。

ペースは場に、ペースは流れに関係するようだ。

了